

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	在宅医療支援システムの 開発・実践について
演者名	遠藤 秀樹 1)、高原 克匡 1)、山口 優美 1)
所属	1)医療法人社団康明会 康明会荻窪クリニック

目的 在宅医療の課題として、・訪問先で書類をいかに短時間で処理できるか、・多職種間で（医師、看護師、事務員、施設職員、薬局）いかに情報共有できるか、・外出先での救急対応に、いかに早く情報を入手し紹介状を作成できるか、・お看取りを当直医師がする際、いかに今までの病状をより把握できるかが挙げられる。特に、紙カルテで運用している医療機関が在宅医療を展開する際に情報共有は重要必須であり、これらを解決すべく我々は在宅医療支援システムを開発した。

実践方法 本システムは、患者基本情報に登録した内容をあらゆる書類に活用でき、在宅医療に付きものの手間のかかる書類作成時間の短縮が図れる。作成した書類は関係各所（医療機関、薬局、訪看ステーションなど）に直接 FAX・メールでき、患者の受診・入院歴を登録することで適切な受診先を選択し、紹介状を迅速に作成できる。また、24 時間の電話対応内容（処方、点滴など）をリアルタイムで共有でき、薬局とも、処方薬剤の在庫確認、代替・粉碎可能かなどを、システムの処方データをもとにやり取りできる。夜間の看取りに関して、家族とのムンテラ内容、延命の希望有無、死亡診断（仮）を入力することで、当直医が対応する場合にも情報共有が図れる。

実践効果 本システムを当院にて平成 26 年 4 月より運用し、訪問診療時の医師、事務員の業務効率化が図られ、患者の診察により多くの時間を割けるようになった。また、夜間対応も Ipad を持って患者宅に伺うことで、クリニックに紙カルテを取に行く時間が省け、迅速な対応に役立っている。Ipad の face time 機能を用いて施設患者の夜間の病状変化を見ながら医師が指示対応できるので、患者はもとより施設スタッフ、夜間当直医の安心となる。

考察 本システムは在宅医療にかかわる多職種間での情報共有ツールとして、地域包括ケアシステムのキーとなる可能性があり、更なる改善を要する。なお、本報告における利益相反はない。